

歩行獲得へのアプローチ ～利用者理解を中心に～

学籍番号 17cc09

学生氏名 金澤咲弥

I. はじめに

A様は、自分とはコミュニケーションを多くとることはできたが、他利用者とのコミュニケーションが少なかったことがあげられる。また、コミュニケーションをとっていく中で、利用者自身、やりたいと思っていることが多くあったことがあげられる。以上のことから、課題をコミュニケーションと歩行に絞り、介護計画を立案した。以下にその実施内容と結果についての報告をする。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：介護老人福祉施設

実習期間：2018年6月25日～2018年7月27日（23日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A様 性別：女性 年齢：80代前半

ADL：移動、食事、排泄などは自立している *移動は車椅子を足で自走

*入浴は見守りが必要

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

①余暇時間には、テレビを見ているか車いすでうろうろとしていることが多い。現在、特にやりたいことは無いが、以前生活をしていたフロアに行き知っている人と話をしたいという訴えはある。以上のことから、他者とのコミュニケーションが減少し、生活に対する意欲低下に繋がってしまう可能性がある。

②車いすを使用しているが、立位は可能。車いすを足で漕いで、全ての移動を行っている。本人は、たまには歩いて運動をしないといけないと思っているが膝や腰が痛くなるとの訴えがある。以上のことから、膝や腰の痛みを考えながらも、歩くことに対する意欲を維持し歩行を行うことで、運動機能の向上に繋がれるのではないかと考えられる。

2. 介護上の課題：

①生活環境を豊かにするために、話し相手や友人を見つける必要がある。

②膝や腰の痛みと向き合いながらも、意欲や運動機能の向上に繋げるためにも歩行を行っていく必要がある。

3. 介護計画

長期目標：充実した生活を送ることができる。

短期目標：①他利用者とコミュニケーションをとることができる。

②自分で歩いて移動することができる。

具体的援助内容

以下から、短期目標②について報告する。

②歩いて散歩をする時間を作る。

- (1) 歩行の声かけ
- (2) 短距離から始める
- (3) 手すりを使用
- (4) 見守り、付き添い
- (5) 体調確認

4. 実施及び結果

7/10 廊下の歩行を行った。「腰・膝が痛い」、「また、転ぶのが怖い」という発言があったが、手すりを使用しながら3m、何も持たずに4mほど歩くことができた。歩行後は「たまには歩かないといけないね」と発言しつつも、「やっぱり歩くのは怖い」という発言もあった。

7/16 目的地を体重計があるところまでとし歩行を行った。声かけをすると最初は「車椅子で行く」という発言があったが、少しの声かけで「行ってみよう」と立ち上がり、手すりをたまに使用しながら体重計まで歩行を行うことができた。終了後、体調を伺う「腰・膝が痛いね」や「やっぱり疲れる」という発言があったが、「運動もしないといけないね」というポジティブな発言もあった。「手すりか杖どっちのほう安定するか」と問うと、「杖のほう安定する」との返答があった。

V. 考察

今回の実施で少しの距離ではあったが歩行を行い身体機能・意欲の維持に繋がったと評価した。しかし「腰や膝が痛い」という発言での、身体的な面での向上には課題が残った。高氏ら¹⁾は高齢者の農作業中での報告において、「しゃがんだ状態での作業、同じ姿勢での長時間作業で腰痛が生じていることが明らかとなった。」このことから、日中車椅子で生活をし、長時間座っている姿勢が続いていることで腰痛が悪化している可能性があるといった見方もできるのではないだろうか。腰痛や膝痛の軽減を図るためにも日ごろから、体を動かす体操や歩行を行っていく必要があると考える。

VI. おわりに

今回、利用者のやりたいことの一つである「歩行」の支援で、思いだけでなく利用者の身体面でのケアも大切だと学んだ。支援を行うためには、身体面・精神面・思いといった色々な角度からの細かい支援が重要だと学んだ。一つのことに捉われず色々な角度からの支援方法を考え、支援を行うことができるような介護福祉士になりたいと思う。

引用・参考文献

- 1)高氏涼太,河野奈美『高齢農作業者に対する腰痛予防に関する研究』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/cjpt/2016/0/2016_1643/_pdf/-char/ja